

保存会だより

発行
徳高人形・
御船祭保存会

文化祭に力作を披露

徳高人形の制作研修の成果を披露する目的で今年五回目となる文化祭の飾り物展示が徳高神社社務所西側に於いて、去る十一月一日から十六日まで行われた。

小平氏、牛流氏、保尊氏それぞれの人形師について研修する後継者達が三日前から単管パイプで建屋を作り、自分達で制作した人形や背景道具を並べて完成させた。

開会式には徳高神社宮司様より「平成二十八年には御遷宮が行われる。これに向けて力を合わせて研修に励んでほしい」との言葉が述べられ、続いて各展示場面の説明がなされた。

牛流教室では『今井四郎兼平の最期』で木曾義仲の家来であった今井が武士の助け合いを表現したことを説明。「今回の人形は馬も人形も全てやり直した」と苦労を語った。

小平教室の藤原國広さんは『小岩嶽城の戦』の場面で「先生のアドバイスなく教室で考えた。他の展示と重なってしまい道具は丸



▲牛流教室



▲小平教室

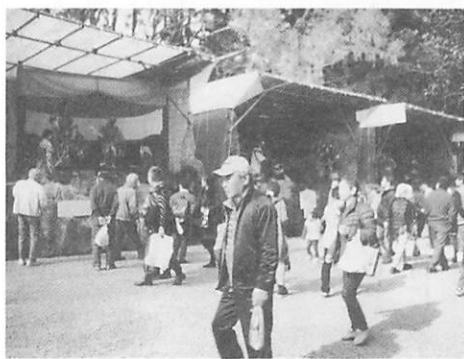


▲保尊教室

太だけとなつてしまった」と語った。
保尊教室の山田孝さんは『歌舞伎の始まり、出雲の阿国京に舞う』の場面で京都で初めて舞われたものが現在の歌舞伎へ至るまでの変遷を説明。着物は女性にも手伝ってもらったこと、鼓が本物そっくりに出来たことなどを説明していた。

開会初日は雨天であったが、上田、辰野から来ている観光客らは「すごくよくできていますNHKの人形劇を思い出す」と見とれていた。

期間中は七五三詣の人ももちろん、最終日はそば祭と重なり、会長は「今年の飾り物は大勢の人に見てもらえて良かった」と喜んでいました。



▲文化祭の様子

第11回 からくり人形と絹織物の町を訪ねて

人形飾り物の知識を広める目的で、名所旧跡を訪ねる研修旅行が、梅雨明けが報じられようとする七月二十二日、三十五人の参加者で行われた。十一回目となる今回は、群馬桐生と木枯らし紋次郎の里三日月村への旅だ。

桐生市は四二二年前徳川幕府が京都と同じ絹織物の町を作ろうと始められた町で、訪れた「有鄰館からくり人形芝居館」では、桐生の町で京都北野天満宮と同じく天満宮を創祀し、その祭りに奉納された人形からくりが伝統芸能として、保存会によって現在継承されている説明の後、「曾我兄弟の夜討ち」と、一六〇年ほど前から始まった水車からくりとも言われる「助六曲縁江戸櫻」が演じられた。機械によって動く人形と、人が操作する人形の芝居に「江戸時代からよく細工されている」と一同感心、後にこの保存会は市と会員有志が費用を出し合い更に来館者からの寄付を募り運営されていることから、当保存会とのやり方の違いお互いの伝統文化維持継承の苦勞が感じられた。



つづいて一行はガイドによる説明を聞きつつ街並みを見学。東洋一と讃えられた紡績、絹織物の町として栄えたが戦時の供出で工場の機械が全てなくなり残されたノコギリ屋根の建物を文化遺産として再利用していることを聞きながら、古民家にて郷土料理の「切り込みうどん」と「織り姫弁当」に舌鼓を打ち、この後織物記念館では機械織りの実体験を見て昔を懐かしんだり、ジャガード製法の説明に感動していた。

「木枯らし紋次郎」で有名な「上州新田郡三日月村」へ場所を移しては、

一つの山が展示会場になっており、茶店や旅籠が道沿いに点在し奥には作家「笹沢佐保」と紋次郎の資料館として展示、ビデオが上映されていた。参加者は茶店に立ち寄りかき氷やラムネで暑さを凌ぎ、山深い峠道を彷彿とさせる素朴な風情を味わっていた。

今回の旅行は、隣群馬県における産業で絹織物の歴史を学びながら、地元の伝統文化維持に努力する人たちと交流、見学できたことが収穫であった。



事前準備に苦勞した若年層講座

子供等に人形飾りの一端を体験してもらい伝統文化の継承に役立てたいと穂高神社の氏子地域で毎年行っている穂高人形制作若年層講座が各研修教室の人形師後継者の人たちによって開かれた。

小平教室では代表する藤原國広さんが頭の作り方として頭の形をした木型に紙を貼り乾燥後はがして頭の張り子を作り、目の形に穴を空け耳や顔の肉付けをしていく行程で、事前に張り子の部分を用意し糊付けから始まり、乾くまで待つことなく肉付けの作業へ入れるように用意していた。子供等からは初めてで目の切り込みや耳の位置が難しいと言いながらも文化祭に出したいと言っていた。



▲小平教室

参加人数	場所	日時	担当
二十人	等々力町区公民館	平成二十五年 十二月二十一日	牛流教室
二十三人	穂高区田中公民館	平成二十六年 一月十九日	保尊教室
十五人	穂高町区公民館	平成二十六年 八月二十四日	小平教室

三か所で行われた若年層講座の日程場所等は左記の通り



▲牛流教室

▲牛流教室
▲ちが喜んで作業に参加していた。

牛流教室では鎧肩当て制作に前もって板へ黒塗り、穴空けを施したものに幾重もの紐を通し編み込んでいく作業に「簡単だ！ おもしろい！」とすぐに慣れて取り組み、完成した鎧を身につけては「記念になる」と写真を撮って楽しんだ。等々力町区では暮れの注連縄作りと餅つき大会に合わせて作っている中で、今年は特に女の子たちが喜んで作業に参加していた。

共に関南小学校へ展示することとした。

共に関南小学校へ展示することとした。



▲南小展示

保尊教室では軍配采配の制作にまずこれらの使い方を説明後前もってコマ、房や作ってあった制作キットを後継者たちが手伝い組立て接着し完成させていた。担当した山田孝さんはキット作りも大変だが、一時間の取り組みで完成を見る事ができ、子供たちにとっては収穫と思わせる事ができた。子供たちに次回への意欲を持たせることができた。またみんなに見てもらおうと昨年作った陣羽織と共に南小学校へ展示することとした。



▲保尊教室

児童の心に響く人形飾り物

子供たちへ穂高人形の伝統文化意識付けに穂高南小学校で毎年行っている人形飾り物展示で、三月十三日穂高人形制作研修保尊教室の「司馬温公の瓶割り」の場が撤去され、つづく二十三日牛流教室の「大国主命と因幡の白兔」の場へと飾り替えられた。学校では春休み中のこの日先生方は「リアルに出来ている。松が本物かと思った」と感心し校長の宮澤純子先生は「いつも素敵な飾り物を有り難うございます。日本神話に忠実に作ってある。低学年の教科書に載っている話です。子供たちが又楽しみに見に来てくれると思います。心に刻んでくれればと思います」と喜んでいました。後日感想では「兎も人もひげがあつてすごい。力があつて強そうだ、迫力がある、うまいと思った」と感動した言葉が寄せられていた。

牛流教室の竹内さんは今回の飾り物は説明書きを同等等々力町区の北村保さんへお願いしてわかりやすく書いてもらいました。と張り切っていた。



御遷宮の人形飾り物場面決まる

去る十一月三日穂高神社参集殿において、平成二十八年に行われる穂高神社式年遷宮祭の奉祝行事で五月一日から十五日の間、神社社務所前と南神苑を会場に開かれる穂高人形飾り物展の場面選定が、主催である穂高神社と穂高人形制作に関わる人たちによって行われた。この飾り物展とは歴史や神話、お伽噺などの場面絵巻として等身大の穂高人形で神社の杜を舞台に繰り広げる壮大なもので、人形飾り物の歴史は明らかではないが、始まりは安曇族中興の祖であった阿曇比羅夫が百済の国に出兵する勇姿を人形に模して飾り、氏人等がその武運を祈ったものと伝わり、あまりにも古いとされている。飾り物場面選定は今年九月より募集をしていた「私が見たい飾り物場面」の応募と、出席者の希望の中から五場面が決定された。この中で平成二十八年の大河ドラマは「真田丸」になっていることから関係する場面は特に盛り上がりと思われている。人形師と人形制作研修教室後継者など穂高人形に関わる人たちはこのときからその日に向けて、人形の作成、背景などの構想を練っていくこととなる。

各人形教室ごとに受け持つ飾り物場面場所は次の通り

研修教室	人形師後継者及び教室代表者	関係団体名	場面名	展示場所
小平教室	小平 貞男 藤原 國広	一真会	『上田城の戦い』 『橋本正成櫻井駅の別れ』	神社南神苑 土俵西側
牛流教室	牛流 弘次 真田 重穂 竹内 敏雄	七星会・健壮団	『加藤清正の虎退治』	神社社務所西側
保尊教室	保尊 和夫 山田 孝	睦友社	『天孫降臨』 『真田丸』	神社参集殿西側 神社弓道場

は「私が見たい飾り物」応募場面

観光客を楽しませる穂高人形

穂高人形制作小平教室が毎年JR穂高駅改札口へ展示している人形飾り物が去る四月二十六日新しい飾り物となった。

今年の場面は「黒田長政の初陣を見送る黒田官兵衛」の場だ。穂高駅では、「毎年穂高駅を訪れる人たちの目を楽しませてくれて有り難い」と喜んでいった。列車の時間待ちなどで人形に目をやり「みんな手作りなんですわね。立派だ。大河ドラマは見えないけど良くできていますわね」と改めて見直していた。



着物御寄進御礼

人形や御船の飾り物に必要な着物類の寄付を多くの方々にお寄せいただき心より御礼申し上げます。

本年度は、着物、帯、袴、羽織、反物の他蚊帳を含め全部で七十八点に及びました。誠に有り難うございます。お寄せいただきました品は、人形飾り物に有効に使用させていただきます。尚、寄付者名は左記の通り。(順不同)

- 松本市 深志神社様
- 安曇野市 両角幸様、平林由美子様、高橋克典様、安曇野市国際化ネットワーク代表丸山美枝様、山口尚幸様

着物類についての御寄付は引き続き受け付けておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

穂高神社社務所 電話〇二六三―八二―二〇〇三